



TITLE:

吉田城先生のいた風景 (吉田城先生
追悼特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

中尾, 裕紀子

CITATION:

中尾, 裕紀子. 吉田城先生のいた風景 (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究 2006, S: 440-443

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138023>

RIGHT:

吉田城先生のいた風景

中 尾 裕紀子 Yukiko NAKAO

吉田城先生の名を初めて耳にしたのは、私が京都大学文学部の二回生か三回生の頃だったか、と思う。当時、社会学の専攻を決めフランス文学に疎かったばかりか、学問全般に怠惰であった私は、マルセル・ブルーストを読んだこともなかった。そんななか、真面目で勉強熱心な友人が、数年間の在外研究を終えた吉田先生の帰朝を興奮気味に教えてくれた。

「吉田先生はブルースト研究で海外でも高名なんだから。京大に入学してからずっと先生の授業に出てみたかったの。」

彼女の言う通り、吉田先生は当時『失われた時を求めて』ブレイヤッド版の編集作業とパリ東洋語学校（イナルコ）での日本語講師の仕事で在仏されており、京大ではしばらく授業をされていなかったのであった。帰朝後第一回目の授業を偵察してきた友人はこう言った。

「ブルーストの草稿のコピーを見せてもらったのよ。みみずのはったような文字ってまさにあれね。あんなの読んでも目が悪くなるはずよ。吉田先生、牛乳瓶の底のような厚い眼鏡をかけてたもの。」

友人の他愛のない感想を十年以上たった今でもはっきりと憶えているのは、このとき初めて草稿研究というものがあることを知ったせいなのか。あるいは、吉田先生とお近づきになってからも、先生が厚いレンズの眼鏡をかけているとは一度も思ったことはなく、事実と反するじゃないかと友人に言ってやりかけたせいなのか…。もちろんのことながら、その後十年以上にもわたって吉田先生の指導を受けることや、自分がブルーストの草稿に悩まされることになるとは予想だにしていなかった。ましてや、当時先生がパリでの激務のなか、病に倒れて間もなくの事であったことも知らなかった。

社会学四回生の時、学士論文のテーマにルネ・ジラルールのブルースト論を選んだのをきっかけに、ブルーストを本格的に勉強したくなり、吉田先生の授業に出席することにした。そして果敢にもフランス語フランス文学科の修士入学試験を受験したのであるが、フランス語力の足りない私が合格するはずはなかった。そんな向こう見ずな私を哀れと思ったのか、受験失敗をきっかけに吉田先生がなんと驚いたことに個人指導を申し出てくれたのである。週に一時間『ゲルマントの方』を読むこと。私が定冠詞、不定冠詞の使い方もよく分かっ

ていなかったのにきっと呆れていただろうと思うが、先生はそんな素振りも見せず懇切丁寧に指導してくださった。そんな優しい面もある一方で、不勉強な者に対しては恐いくらいに厳しかった。準備が充分に出来ていない前日は不安で眠れぬこともあったくらいで、個人指導が終わった時には正直ほっとした気持ちだったが、今振り返ってみると、やはりあれは最高に贅沢な時間だったと思える。あの時、辞書を引き引き一生懸命に読んだ『ゲルマントの方』の冒頭部分、田舎出のフランソワーズがパリで小鳥の囀りを聞きながらコンプレを懐かしむくだりは、長い小説の中で一番胸に刻まれている。先生はその後、修士、博士課程を通じて私のブルースト研究を指導してくれたのであるが、私の全ての知識は先生に負うと言っても過言ではないような気がする。

さて、吉田先生のお人柄について私が説明するまでもないと思うのだけれど、あらゆる面において鮮烈な印象を残す方であった。学生達と喫茶店でおしゃべりするのがお好きで、いつも話題を引っ張っていくばかりか、その場にいる全ての人に気配りを忘れなかった。寡黙なフランス人研究者を前にしても、フランス語で冗談を言っては場をなごませるのに、何度感心させられたことか。いつもおしゃれな装いで大学にいらしたけれど、茶髪が流行りだすとカラーメッシュを入れて来られたのには驚いてしまった。研究室でインターネットを誰より早く活用されたのも先生で、学生以上に進歩的だった。先生の好奇心が研究以外の分野にも幅広く発揮されているのを目の当たりにすると、ずっと年下の自分が相変わらずぼんやりした生活を送っていることに気づかされるのであった。

私が吉田先生を知った頃は、先生はもう既に病を患われていたわけなのだが、いつもエネルギーに満ちあふれていたせいか、先生の病状に危惧を抱くようなことがなかった。もちろん先生がご自分の症状を説明することはよくあったけれど。

「昨晚は右手が痛くて眠れなかったんですよ。」

それをまるで他人事のようにあっさりとおっしゃられるので、きっと一時的な症状で、また治らるであろうとこちらは思ってしまうのであった。私がフランスに留学してからのことであるが、フランス国立図書館でのブルーストの討論会に参加するため吉田先生が来仏され、パリでの一日をお供する機会があった。先生は午前中その討論会で日本におけるブルースト研究の現状を報告し、その後散策に出かけたのだが、とても病を患われているとは思えない活動っぷりであった。フランスで過ごす時間を一秒でも無駄にしたいくないかのように歩

きまわった末、その日の夜はオペラ座でバレエを見ようということになった。そう決めた途端、先生はみじんの疲れを見せることなく、こう切り出された。

「疲れたから少しホテルで休んできます。ではオペラ座で待ち合わせということ。」

そう言ってあっさり姿を消してしまった。朝からずっと先生の後に従っていた私と小黑君は突然放り出された形で、「疲れたね」とポツポツと言葉を交わすしかなかった。でも、先生は私たち以上に疲れていたのではなかったろうか。

吉田先生が専門とされていた草稿研究を、私にできるわけがないという劣等感と、できることなら苦労は避けて通りたいという怠け心から、手を出さないように努めてきたのだが、フランスに来てみると、草稿が必須の研究資料として用いられているのに気づき、取り組まざる得なくなった。当然のことながら、ブルースト独特の字体に手も足も出ず、膨大な量の資料を前にして絶望的な気持ちになった。先生に何かの手紙を書いた折に、どう読んだらいいのか、何かコツがあれば教えて下さいとすがる思いで書き添えた。先生はどんな手紙や電話にでも時間を置かず連絡を返して下さい方だった。この時もすぐお返事を書き送ってくれたのだが、それを読んでがっかりしてしまった。

「忍耐と受苦です。」

禅問答をされているのだろうか。もちろん手紙で草稿を読み解く指導など容易ではないに違いない。吉田先生には何から何まで指導してもらったけれど、専門分野だけは教えてもらえなかったな、秘術というわけか、などとブツブツ呟きながら草稿を一年も眺めていると、なんとなく読めてくるものであった。「忍耐と受苦」とは真の教えであったかと思ったりもした。

先生に最後にお会いしたのは、2004年の春頃 ITEMの研究会でパリにいらした時であった。研究発表の後、先生は私にカフェでお茶を飲みながらお話ししましょうと誘ってくださったのだが、忽ち大勢の研究者が先生をとり囲んでしまい、残念ながらほとんどお話しすることができなかった。連日の会食のせいか、先生は疲れた顔色をしていたけれど、その後直ぐマリー・ド・レニエの展覧会に出かけるのだと熱心に話しておられるのが耳に入った。相変わらず時間を余すことなく活用しておられるのだなと感心しつつ、先生とお別れした。

その後、私の身辺も慌しくなり、博士論文を仕上げる前に出産を迎え、吉田先生に研究報告を送れぬままに時間がたってしまった。そして突然の逝去の知

らせ。先生の病状が深刻化していたことをちっとも知らずにいたせいか、随分と信じる事が出来なかった。この悲報を前にして、忙しさを理由に博士論文を後回しにしてきた自分が恥ずかしくてならなかった。先生は病を抱えていたにもかかわらず、精力的に研究活動されていた。「忍耐と受苦」とは先生が病の苦しさに負けぬよう、ご自分に言い聞かせていた言葉なのかもしれないと、あの教えが重みを増してきた。在仏中の私は先生のお葬式に参列することもできないまま、残された御家族はどんなに悲しんでおられるだろうかと気がかりだった。というのも、最後に先生からいただいたメールには15歳になったお嬢さん、梨奈ちゃんがおしゃれに夢中であること、ご子息の笙太君が先生のいい遊び相手になっていることが綴られており、家族を思いやる先生のお気持ちが十分に伝わってきたからだ。それは私の出産の報告に対するお返事であった。「子供を持つ喜びは、実際持ってからでないとわからないものです」と。

こうして振り返ってみると、京大入学以降十年以上にわたる私の学生生活は、城先生に支えられてきたことに気づかされる。思い出すのは常に精力的に活躍する先生の姿だけに、この長い年月がちょうど先生の闘病生活に相当するのに驚いてしまう。私の中では未だに先生と死のイメージが結びつかないのである。昨年末久しぶりに帰国し、京大に立ち寄った際、城先生の研究室に通していただく機会に恵まれた。先生のカーディガンと室内履きがそのままになっているのを目にすると、先生はちょっと研究室を空けただけで、どこからともなく戻って来られるような印象を受けた。

(なかお・ゆきこ パリ第4大学博士課程)